闕疑抄

三

WA 7
45
3

国立国会図書館　タイトル『闕疑抄 5巻』 請求記号 WA7-45

ガラス使用

闕疑抄

三

WA 7
45
3

国立国会図書館　タイトル『闕疑抄 5巻』 請求記号 WA7-45

ガラス使用

闕疑抄巻第三

根岸信輔氏寄贈

むかし男色このミとしるしく女をあひいるゝかゝ
されとめくこゝもとあらざわかりしば(數)くいに[illegible]
[illegible]いとうし後めこくさ里とそいのでわこえ[illegible]
[illegible]の里をかな[illegible]ありざ里なる中なり
[illegible]ふ後の三日ばかりさいのあとありてえいので
[illegible]
めくこゝもとあらさ里かりもこゝ又也我もかわ後
このむましき物とかひて分別志されはよくかゝ
ぬなり是無後のあらひ也志いくいなそれと常
乃所よりもうしろめたけれハ志けきけり也され
とも物うしろめたくんをかゝるゝなりさ里とそ

いかてうしろめたくしかわとてそのまゝゆかを
志てをゐ給れぬなり粗わたえあらさ里をわまた
うら粗むゐきやうも事なわ粗わたハ我と升
けあてをてんと なへとをすてかたきなわ二日
三日りの里をあるハ海へりしハくといひて
あるなとあこしまめ此出なわ宵空ゆと此頃乃詞
よくくゝ別してみるゐきとあわ少むつしを
あとをの次第なり志ハくハ数乃字なり此頃よ
りて乃字三ツ出郎ぬりてわた漸いまハをれなし
いかそんた丘也ゐ浅はたとを偕なわ
いでこゝし給だまいはゞうハらじを
うがあよひちとをはなる説

心をぬなりまうなりふ人乃たれみうきといふ
んなわ色ぬ乃女なまは我いてこゝしろよわそれ
人のうよひちとう今ハなはらんとなり
ものうたがりしさまよめ字也をり筆を筆者乃詞也
芳和歌乃こと中すゑておはしぬしけり
賀陽親王
勘物云賀陽親王桓武第七母夫人多治比氏三品治
部也貞観十三年十月八日薨七十八栄花物語に
むしかやゝ乃ゝ志といひ志人ゝ細工ハかし
こうわかれとうをわ
それみて女をおかしめしていとうしこ少めぐ三ツ
愛日本紀
うふこまひけうを人なぬめをそあわをくをまれれ
みをおりひかほをまた人やそつけて文屋なとゝ

きをれ（繪）うたをうなて

御説女我おりめに意得ぬはあらに女をめく
みたまふ侍まんこんなり人なは免きて業平なり
又人字は第二業平乃はまのみとおりひそうよ
うやのこの侍竈愛と字はくはなり
郭云乃うたを出て給ひ書たるまや
郭云なり（汝）なく里のわらたあまは
か我うとまれぬおもふそのうら
なうなくは汝如鳴なり郭云なんちかなく里乃
何またきなくふう堂まんとおりへとを物をもは
ふくとなりう堂はれぬ乃ぬるぞりんぬ也この哥
古今第三よみ人しらにのうたなり

といふなりこの女をしき我とまて
我我うたふかと業平をしき我と侍なり桜嬢
をとる乃こ侍なり
又乃こたはしてれ毎をさへ第さう鳴
いはりなまこ堂う堂はまぬまへ
忌見抄ふしてあををはへ郭云の異名なり堂云
ふ此哥ひ見こうわ古今ひ　いくたく乃田
をはくまたる時多してあ毎をは我朝ふくふ
此哥は郭云なりてしてあ田をはとて別ひ
あるやうにやまこ侍わ時多れ鳴はとれあまこ
と名ひ毎侍るかとよそれゆへひ君は今なく
といふなりをさへしとといふこ侍也　甲苗と侍なり

まさを鳴時なしせれ田をさとむへをいひくり
ときいさ月になんあまをり男ぬし
いかまおほきしで乃田をさいかを(ほ)れむ
我住さとりあらさんをハ
やうこなるりといひたるさ也よしそなるこハ
いほまあまたにあまとをはまりたり語ぬす
あらはれたのまんといなりれさらに儀也あれ
業平乃心ばり
むしあがこへ(縣)行人まむまのくれむけせんとて(餞)
よびてうときんにしあらざりをまはいへ(ア)やう(自)志行
かけなけくをて女乃行(装)ぎくうげ(束)きん也すわるさ
乃おとこ 斉よりて(裳)りのこしにゆひつけさは

縣へ行人ぬ中へ下る人なりの常かるす也
う也な人にしあらさりくれ業平はの常りむあ
なまくうときん人にもあらにといふ家童子我妻を
いふ女乃さうそく裳わらきぬれやうなるの也
いてこゆく君のこめにとぬぎ法まは
我さんをなくなりぬるきうな
いてこり人のために衣をぬきてやまハわれさん
裳のなくなるとて也をん喪乃字なり喪乃字をは
わきまひ也よめり衣裳のもなくと云ぬりして禍
なくと云ん我積里人りよきるすをなるにまハ
まをにもよきる有陰徳陽報なりたまれりなうち
乃限ハたひらけをあけくあらんすもなくあらん

を世の中のうけくつらけきとありもなくに裳
乃字をかけりうらむ絵もの時ハをうあるなり
これ云ハあるうゆりりおもしろけまぢんとあて
よりぞいらに（バ真）あぢハひて（深きあぢひ出ぬ真）
ときの花に對し月に向てこ当所をハそれも
く讀物なりこれを旅行乃ひとり女の裳來ぬ
いとをとよめる風情をかし一大事雖然なれ
なすくおもしろきよめなかなりあちハ
ひては業平乃ちらわさをしらし沉吟して案志
つんとなり業平乃我妻りけりてよむなり
そまよよ成する世いふ似なり業平乃清女のしん
なひにくをみへし

むりしおもこあのぎり人のむしを免りしばくいふで
この男ふそのいたん世おりひけりうらいでんしと
うさくやあの世んそのやみよなりてしぬべきよとき
にうくしうおりひしかといひ（ケ）きん我おや字にあく
なくくつ苦ろりれば成どひきさ里ぬれどし
ふりればつまくとこもりおもり時をみな月の
はこもりいとあつきころ（ゆ）ひふよひはしうびおもり
て夜ふけて空（漸）ことしにしをを吹りかたるたうう
とむわがふちの男見ふをりて
人乃女れしはく傷いはきうしつく女なりかく
いひいてんもいふことひくとおりふをとに
やまひはくなりかくし我思ひしうしむすめ乃

めれとなをやう乃ものりさんけせうなる事
そ連を女れあや乃ゆ法を業平へ御出ありて
ほらんしておもれ覚いふ聞くく業平れまゝ
ひきこれとをもやなくなる事也々ふはそれまゝけ
う聞ひ母あを法也一月を見ぬ人なれとを忘ふこ
もる是業平のんなり時をみな月六月下旬の比
なりよひハあ世ぬ於里常乃遊らんかくハあれ
ましあ法れなとを納涼する也新ふ事て六月晦
日なれはりこへまゝしれ風乃吹時ハ蛍のたりく
とむ何かなをみる面白詞なり何と聞らんふせり
うれりし詠き云歌なり
ゆくかたる雲乃うへまていぬ往ぬ色く住

秋りをふくとうわをつけこを
後撰ゆは秋乃新を業平乃前と入こり屋を中に
志たるをやこゝハなり乃哥也よひ乃なとハあり
皇をなをこしきやうなるか新ふ事て分り志む
りせぬきて仲秋れそれやうふおほゆりおふし蛍
りなくとふなり薫蓮の暗蛍知新楊柳風を屋乃秋
夕屋蛍飛田清絃孤灯龍尽来能眠なと此體なり為
おももよりし多てよといふんなり
蓄りこきを乃日くらしなりむまい
それあとゝなく拂うりなしき
此哥ハこの夜よそこれとハ見て寸前段は志らん
ゆえりこりりてひる法かゝなと讀たる哥なり

へし日くらしすゝて後なり蝶乃日くらし鳴
なとハにこ里てよむ也しかしこそのあとこなくせ
いへるむ面白この女なまあしこそろこしたなけ
まとも里我なりふゆへりなくあると云人れ
いえりあを事ハ家にを名殊にきんともあらを
そのこゝろなく物ゆるしきとこゝ在間乃無常
りよ見ゝれこ後詞餘情のさ里なるようこなり
むし男いとうなりしにとも友をあらしこ時さらば
あひなりひきり我人他乃國へいまゝりをいとあま稜
となりひてまゝ事に事り月日無こをこれふこ
にあさましく思ふ對ひめ面んをて月日のへにきりあと
（傍注本は之字なし「はなもなし」）
まされ所にまひ事んといふ思ひまびてゐん侍ル

世中の人乃人はめが目離まばまれぬ色きそのに
あうあめまといふりけれどよみて居ゆ
うるりしおともく業平乃友なり朋友乃ましりわ
は親子よりもむつましき物也人のくにへいれ
ゐる人乃国他国也任にたもむくに一任四ケ年壹
國ハ五ケ年なりさやうのときの乃あとなゆへし
只随意り人の國へ下にはあ居しす月日無て
とこをたる文ゐ中よりをあを無ゆ文なり元詩
にも一日不見如三秋分ぞいゐりめあるまハます
まぬ色きあさゆしく對面をそめかるれハなと文
のあとなゆ居し
めかはとをおもかえなくり忘らるゝ

ときしなけれハ面部りたほ
あなたハめの部とを相ほえを忘るゝ時志なれ
ん常に相もうけのはなるゝなしと云心所り
むし男孫ん此りいうでとなりふ女あたわされと
このおとを我あざなりせ吹てつまなさ乃見下さわ
はくいあり
おほぬさ幣れ引てなまこりなりぬまい
おりへとえこそ新さわけま
大ぬさハ祓の具なりあまこれ乃手我ふうこその
也あまあれりひきを多かとなたのまれぬなり
うへしをとこ
おほぬれと名りようをてれなうまても

つゐりよなせはをとしふものを
大ぬさハあまこれ乃手我かくふこのあくハあま
とを祓してなうをはよ新せなわはいのよるせハ
我なた我あうといへなり
むし男あわりむ成乃られむけせんとそ人を詣
をうりこさりをまは
旅へ行人を馬乃られむけせんとをまはなそく
きこなをまつなり　餞
いまをしるくるしき物と人まるん
里をそうまずとふべうわをり
此所ハ古今第十八にあり云新書り紀の利貞り
何波のすけにまうわ々なり時りむまのられむ

せんとそのふといひおくれりをり時ふことし
こに西りありきて秋ふをるまて見えさわれ
を清りたしけり業平此朝臣乃哥堂あり所此
心を時なり人をまつるのハくるしなるの也人の
まほといはゝ万事をさしおきてゆくへなる事
ゆてあるよと我心ゆ所解する也句法面白し
昔おとこいをうとのいとをりしおなりをんを見れを
里て
（傍注本きるゝ二字なし）
うらまうみねよがるゝ見ゆる若草哉
人のむすもんあとをしそおもふ
常ゆは業平乃妹をけさうして讀といふことを
志かりすいもう堂を不便りおりひてまんえん

ゆくいへる也稱よ者ゆは草のねりよせてぬ
新りる哉いなり我ハ妹哉子細なしとこまとも人
乃こ落ハ万葉なれハ何ゝ新幸おもひかすして居
あらんとんをる志く思ふ也此心未まて見へたり
堂ゆのこ歩り丑し
たれ草乃なとめつらしにあと乃たう
うらなくこのをおもひをり哉
（心）
清説物草ハめつらしに堂ゆんとそをきたれ
字なり是雅望を大切りおりしめはるのとき
かゝをおりふなり源氏あけ海なふ白ふ兵部也此
（傍注ノ標注ニモコレヲ引ケリ）
一家此家り絵をこをまいらをら海ゝ時うらな
く物おといひたるひめ君をされてあくこおほさ

おといなりあまよきとわあハせみくはあ里され
とも此哥此心ハ此ハ〳〵はこ後ゑまし き也二条家
乃ん女とり史まさやうにハあるまし きるす
なり伊勢物語源氏なとハ奴色をは中と世を元祐
三百篇も男女乃ゑすをもりて政乃中とをり物
をかゝ乃うるす女なりと云故なりそ是をこゝ奴
色乃こゝをかとしていふへまあと何此曲をなし
すなわ梵網經なとかもいふ志めてゝをり梵網經十
重禁戒之中第二婬戒云不擇畜生乃至母女姉妹
六親行婬甚慈悲心者是菩薩波羅夷罪哉云を兄弟
乃ゑすふいひそろなりうなり乃いちめをなさん
ためまゝたるもの也女子なとをそいふのふも能そ

きゝむ色きあとと云俗り所要也こゝをならひに
中也いもうとに心ハ付て行末ハ我おりひたる
所ハ後り露顕をろなりうらなくん座に徹志て
かやうにおりしいまたるんよとみくにくなす
とをおりふるなり
むし男あ里かわうらむ我人をうらみて
とりのあをと我づくとをはかけぬとを
おもはぬ人を思ふものかハ
那をひとはのさ孫んもをなりてなりうこし百
乃那ハうさほら家事有ましきあとをいふ也
世間乃わふなれ我累那と云文撰の任り説苑
を引晋平公如時に九層乃臺我はくは苗息のこれ

いさめんとて足ハよく碁子我十二り出ゆてそ上
小卯九月我加さぬるゝをする也云平公此曰う
まハわ屋うれるゝなり首息曰是あやうりしす公
乃九層臺我作て百姓を煩はせこれたるあや
うきあと也と云平公乃能解して臺我作ゆるおや
めたり文選注ゆは平公我灵公とし碁子乃術する
也いふ物を孫息としたりあくハ前あと機緣の
方ゆはあらせるゝまし　きす事ゆいふ也たとひ
あまし　きあとハありとそおそいぬ人我おもふ
といふるゝハあらぬし　れなり
也いるりかれを　女真
あさ家を清我てもあぬへし

それかこの世をこのそは清へ果
電光朝露ハあるなりのりいるりつゆは物は
うりをあて日新り清て我雅ぬ物なり志きん物
つゆハ清乃ありてをありぬへしそれかこれ世を
たのまんといるりあるなりあるの世をたのむるき
ゆあらに也よめり大才此世我いふやうなれと奥
をおとこ乃心何るなるをうしているりなり
まるこおとを
吹風りしうぐれ樣をちらぐとを
あるこのみがたく難人のこ後ハ
今年のさくらなりとをちらにしてはきりたきを
年乃樣りなにかのこる事有るきそそまもの

こなるのありとも人乃こゝろ乃ゑ毎のみすゝしと
なりち年乃さくらといへ事ゝ一室らしていなり
也　こうの石を蟻りおふきてもこふともあ
た乃ゑかゝ人乃あころは縦旧年花孫梢詩後素雑
軒笠傍人ん
又女ゝへし
行あり（數）ゐ出よりもなりなれは
おもしぬ人我なりふ娥なり
万葉第一水上（ミヅノウヘニ）如數（カズヤリコトキワカイチ）吾命（イモミアハニト）妹相受日（ウケヒツルヤモ）鶴鴨
經文亦如蚤水漬昏隠合とあり心所り
まるおとこ
ゆくあと（を）ゐなよはひとちり花と
いはまくて（待云）ふと我字らん

前乃奇にいへるものを充集てよめ里目月乃
行ハ山あ乃ことしをまるよもひ又ゆくめ行れ
すちる花にくへうこし是らハおほふもの乃
袖あつてりぞめ遠すいはれもまそといふる
ぬさうまうまのあり
あざくらべ（互）のたゝり志けをり男女此志乃ひあ里
きしをりあとあるなし
物語乃作者乃詞なり志のひにわき男我を汚めを
しそ好色をもつてあるく者志をりるゝといなり
ひし男人乃せんだいり菊うへ（忘）ゐなる
うへしうへ（忘）ぞ秋なる時屋にのぼらん
ちれしうちらめ稀さへ遠めや

うなしうへハ重詞なりうなんとうなんなんはと
いふんかり表状ハきはまる限なしこのたれをう
へをくなりは状れなりらんときハいさしらさ
かぬるすハありへかりすたれありちおとも根れ
かるこるすハ有ましきなりか状万歳そうへし
堂い為里人れ花なをうへこうん時そこのこ後を
りけてよむなし
むりし男ありけりんのもとよりかざりち粽ぬき「絨」れ
こせたりけりかへ里ことり
うさわちぬれちまれを糸なとかて堂これをいふ
拾遺乃辞なとりあるなりなりて福乃中ゆはりさ
なりちぬきとあり

何屋めかり志ハぬきまうぬとひをう
我ハ聖り出てあるそまひしき
あやめかく粽をするあとなけれともふたあや
めを貴する日なれをうくいなりまつうさわちぬ
なをこせたる絨謝しこうかうなこそ沼まよひ
いてこちまれをして折れ里ハ聖り出て
物絨もうとて雉を屋ぬなり拾遺才十八五月五日
にちいさなりさわちまれ絨山菱の籐に入て堂を
とてきじ雉になん屋わなり
むりし紙とこあひがこき女にあひて物語なとする
をとりとり乃なれ
しこ繁出絨心りおひて此要をしまハいまあひ

何わさ升くあふて物語せんたに殘多しらん
りあひしなにあへ家人にこうとおりふへし
いまてよりは鳥の鳴らん人しれを
思ふこゝ殘ハ海た鶴鳴ゆれに
あいかしこれ人にあふ鶴乃ふきまれ殘多きにいまて
りハ鳥乃鳴らん世とりめ おもふんハまゝよふれ
にといへるさ海首尾ね遊云語乃ひ乃哥なり詮ん
更たる鶴ものあり おほさりいまた姫ぬやう
におりひたる事なし 餘情なまわ事れ言なり
むし男つきなす里なる女りいひ居りけり
けりやらぬ事 殘ことにたりとゆは
何まに宣なり露やおもらん

たとる天福此年にはこのむとあり哥乃んはやう
もなし義なしてハこのむるもなれり 是非も
あそれして辛勞なりかなたあなたとるゆへる
こりとに露かをくなり此ゆは常乃何きの行宛
なる露まてハあるなれおりひ乃露こうをくら
むせいふ殘とうめてこましあくろ思ら家なり
露や乃やの字りあこ里て見るなり後撰りを
あり清さしなれこあり同んなり
昔をとこおりひかけこれ女のえう得ぬさうなりてれ
より
ついり我女にまもる色きやうなきをいふ
思ひばハありもをしめぜあとの繁れ

わかしあとりこの後ふかふ
世なかふかは有けるものとをおもはしをすらめ
とこなかふかはこしかこさきこらていひおきたる
あとのもおもしあとりあのまふくとなり
吉野川よしや人よりつらうらやくいひてしき
あとはまそれしこのうこの心所り
若おもこふして思ひをきて思ひくはまりて
まり袖は草の房かあらはとを
をはまハつゆのやとを也（とそなる真）なり
かして思ひをあそおりひ造次顛沛二六時中なり
詞事源切なり奇はあきくとしてあとは事
にお庭をぬやうなれとをふかなんのあるなり

をきけねはうらなかめ續うしなる下し我袖はと
いふ春秋の夕をうちなかめなとして見まハ花
霧ふかし我夕の袖も物おりふりいけとなくを
なし霧なまとを夕を感してあまハ草乃いほり
ならぬ世てをよき露れやとり所とするまは草
木れ霧よりを後さりてをきはまる心なりくはれ
は乃詞殊勝なり
むし男（真ニナニ）人志まぬ物思ひ（まつる男真）なりはまる紀人のもとに
こひまひぬわまのかるもりなとるてふ
まれうら身おもくた身はうかれ
め文字の所要なり年月いのさ後まきんと思ひ
きこれともなふ乃うひをなくうちすきてよし

なるまゝ辛労して年月をとく里へりこれ
を里わらず我くるさはれよと観してうめ里
年月をかさ稀ハそをいたまゝめん我はく
つまとりひなけまハうたへしく　おふ不
を意ひぬ也五文字ひとはなくいなりなり
ひしんはなくさこのみなにおとこなりを加と云
ここ後にいへはくりておわかりうらのとなりなり
おりなぐらにあとをなれ女どもれぬ中城をまば
田からんとてこれ男れあるをみくいみじれ
そのこゝ志わざやとてあつまりていわれけまハこの
男にげてをくりうくまにおれば女
長岡に伊豆内親王乃家ゆしそのかとわ乃家たち

乃ちなり桓武乃御子宮はら内親皇以下のまゝ
おはしはしそのたちの子ゝや純子萬子桂子仲
野内親皇家ゝといひきり詞むりし用ゐるゝや
心はなて業平の奴色乃物おもひにん我はくして
なりも思うわり立たる故乃詞なりなりより
愚見に桓武天皇女あまたに長岡に京に住たまふ也
はわ平城御子伊保親王乃詞なれハ業平すまん
ちさもあれてしことをなれ女子個なれおんな
なりみやはらへ乃女とも也田からんとてうたる
中なれんを所のこみ乃田我するをみる也又業平
乃住所我見いひよらんとてたハふまりいへる
ことなる也いひしれをきりのゝ業平乃家居與

ありてすゝなを話を女乃かめたるなりは暗誰偕
乃やうにしなせり
あまにくりあれいく世れやとなれば
すゝきん人のおとばまをせぬ
古今集十八よみ人しらに乃云也業平乃さちうく
れたるを女乃とうめくあるしのなきんをさん
てあまにくりといふあふしもなく人をなき
もいく世乃宿かくのあるらんをみくる人乃おと
はまもせぬとよめり
といひてこのこやりあはまをきいてきくれて男
むくらおひてあまたる宿乃慨うれたない
うりみををりの集をだくなりけり

前りあまにせりといふうたをうけていふ也
鬼とは女をいふ藻生てあれそうなとのうれり
き我女とも乃あつ成るかさらに中皇にもあらに
とよめり又女を鬼也いふは拾遺集平遠盗の哥
にみちれく乃あさちう原れく後はうにをにあを
れりといふはまことのみちれ國なとも乃那くろ
はかといふ所に室之のいもうとなまたありと也
はまそいひけりは一々はとなり女乃手ををに
といふ也見えたり肖也大師誓願れ文詞みを
訪猛大士詞をうくまし一なり訪猛大士曰女人地
獄使能行佛種子面似菩薩内人如夜刹然則於我
門徒者眼不見女人下略

とてなんいざしよりをうこの女とをかひろりん
といひをまは
前より田ゆうん世いへる首尾也是をたいふれ也
うらもひてをちがひろふときうはせい
我をあづ面うりゆうましりのを
我なたよをちかひろふといふなとにまれも同ぬ
せんをのおとなり患皆誹偕なり
むし男京をいふこ思ひをんひんがし山より寸
ほんせおりひいわて
前にも京や住うりなんとなしなり業平左遷
此時なり
をみまひぬいほはかまわと山里より

男をうくすへき宿りとめてん
俊ハあらはなりは撰には業平とあわてはまこ
ほ色きとあり後撰也あ説いけれをも新用されと
見ことも　住わひて男をうくをへき山里に住まり
女はなれよはの月うか　今はとて妻木あるへまな
宿乃私子世をハ君也な我いのうち
かくてをのいさくや　みくしたりいわうりなれは
おもてにあそこきなとしていまいでこ
かく物いさくや見て思君をんとおへと心不平
にして物おりひ乃病氣となわて絶入したる也
なり面に水そこく以冷の灑面乃ふ所り絶入をう
者にはおもてうしをそこきそ蘇生するなり此

儀嚴勝王經なと毋もあり
まううへ了露ぶ世くる家銀河
門 堂 旦ふれ家れ棹ひれしぼくが ドナニイキ おテタリケル
こうんいひていさおこりける 夢注本
こつをそこうまていな出てあまはよの法ほの家
毋くもあらし天川のとわさ家私乃ひ乃志津
くあくうあらん堂なりその家我うせきつんと
いふ心ありいれいてこ即要をよむ心きとくなり
造次顛沛たゝ家り心をおくるよりてなり 斉
人はこの人我平生おりふ為きる也古今あくは
この 斉乃人別なり
むりしおとこあまをり家法加へいせかいしくんも
まめならさませりかとのい元堂うし海めり おも

りんといふ人は法まて人のくにへいふせりこの男
守佐乃法ひまて升きるふあらくに乃志そう
乃皮人のめふてなんあると安ておんなあおしふ
うそうあとうをよ法ふをは乃ましといひ 久れ
りはらけとりていふしうけりさうれなり
せくたちなる我とりて
家つ人いせしく約家なる乃こまして家り
ぬ話あとをる紀我いふんもまめならさわせると
を業平乃家我りなりみるあともなれなり色好れ
あとふをとまありぬなと乃なる公まやまめふをを
たんと云人り独住乃やうふあらんよりいよく
おもそんといふ人のりとまきほせんなと媒をる

もろくいふなりそまにはなてひとの國へ行也
このおとこ宇佐の使にて葉平うさの法のひに
をたるなり想別法代より一度使たり時はさゝめ
て和氣の清丸の子孫なりてもうさの使より初ト
るなり不家なり但上古には宇佐へも志けをつ
かひなて里何時を朝家の重るなりあまは使たて里
何時を朝家の重るなりあまはんはかひを立給ひて弱
かしされを神勅なりよはて定め給れし也然を
孝謙天皇惠美押勝道鏡法師か事なとにみたれ
たるなりまし國をは向後也答かましなとて
そまよりして亞の神勅にかゝるまゝの志也されとも
朝朝家に重る有時は宇佐へ使をたてゝとはなく

なりこゝは代奴のあとはみこゝの時にてもあれ
是し肖字には御代に一度を弊の使あるこゝに
いふは清和の法代なり貞觀の初にやとのわかり
國の志ぬうの皮人の至りの中西急
なる御色きの志うの皮人祇兼也職掌の皮の中に
志そうの皮いくらをあり勅使の下る時彈こを
定て國のなひをなし餐庭なとするなりを不
なりをひて何しとおもあつかふ祇兼皮也宇佐に
かなしの秋宗にもあり伊勢の一ぬうの皮除目
にも祇兼の皮は掾なとにも任をり諸國なりあ
りのとみこゝらさやうの皮人のめになりてのわ
そまを使てもとみし人かとおりひ屋にと葉平の

うく云也勅使乃俊なれハいなミうしさきとて女を
出せる也祇兼そしう乃言なし古今兼均法師とき
さ月まつ花たちはれの事をすけハ
むかし乃人乃袖のかうすり
古今第三讀人不知哥なり五月まつとい為とて
卯月とはいはなるに橘ならぬ月りさく
りのなれも花橘といはん　そてさ月まつとをもり
りとしりたるひとせいはんとてむかし乃人の袖
のうせいなり我袖に橘に昔の袖紙よ見合す後
あと漢書に興芳七尺之慮橘絶傳左袖欽著まちち
きまし　あとをいひ出しそうなり
といひをうり世おりひいてこ何まに敬て山り
いわてそあるもをう
ようらぬこのこいひなしによりてうくゐ中に
いてをちにまさ祇を面目なしと思ふなるへし
面ことに可然とあらはりあわてたりしらまん
ハ古川かしかるなしいもんや志そう乃皮人此
いやしきりのこめりなわてあるとおりひうん
してなまのになるなりいはも媒せしものもうら
めしうらん
むかしおとこ侍くしまそいまたいもうなれは
色このむといふ事紀之の世をそれのうちなる人此
いひをり我字て
是を宇佐乃使のるすかあまハ色このむ葉平をそ

てあまたう色これ見乃すきものよといふを少也
箇中乃人これとをなし
そめ河をわたらんひ世のいかてかん
色りなるてふあとのなからん
筑前り深川といふ名所あり深河をわたりてき
たるかとの人の色りなるにはあふ色しすと
いふりさやうになくてはとそまに成て讀ばなり
おんなゑし
名にしをはゝあたにふう有色きごたれ鴻
なゝ乃ぬまきぬきうといふなり
色このゝ世いふ残さいなし世業平乃陳をは又
別にもいふへまより中しく色このみ世うけこ
色りなとをさへてよめばなりうなるかぬ色と
うつていてゝいたゝさを新色ぬにはあへかゝを
たれ鴻をよ世よりうまに浪乃らせかへ新り白
絹乃やうに見ゆまとをちかくよりて見まに表実
乃きぬにあらすなゝ乃ぬまゝ衣をあて世なこの色
この見と名りこれを宝るなり色し浪のぬれ
きぬれことくよそよりしるゆはうたるへしと
いふなり風流鴻肥後にあり
まめなれとあた名ハ立ぬたれ志岡
よる白波残ぬれきぬりしそ
なにしをはゝあたに世おりふこれし岡
波乃ぬれ衣いくよきけらん

国立国会図書館　タイトル『闕疑抄 5巻』 請求記号 WA7-45
ガラス使用

何もせてしかなと思ふ心あり是をりりしあり
きぎりにいまあひて道にて馬乃くらをとりてうう
くなれおもふといひをまはあられりてきて弥
りぎりさて乃ち男見てさりけまハ女をとこ乃い
えにいまてういはみぎり我おとあが乃ふにみて
此女それとをなし古注には三人の名ことくく
何れ無正躰趣なり不用之此女をしきいとよし歡
然ハ一時は足れをしまなりあと人ハ升堂な
さけるし三良なるなのこゝ法なり在外中ねに
あまをたきと おもふ也在五中ねは在原氏にて第
五れ男なまをうくいふなりうわしあわきなほ
業平乃ふ里なり

をことせり一とせこゝぬはくわかれ
ほまをこ姫らし面かけに見也
何なうち九十九といふ儀まはあらす我心りは
かれをさましを年れ老たる女なまはかくいふ
なりされと夫おもすてぬ不業平乃人をあそまひ
情姫ゝ紀性也次乃時りそれんかんてかはくも
かしもみしうくして藻なと我はくねたるやう
なるをいふ江沢藻と書なり
とていて何なし紀を見てむそうらうらりう
うわていえりきそう地ふをりおとこかの女乃せ
志ゆうハ志のひてをそ里てみまハ女なおをそぬとて
出たはけ志な業平のさらハぬりんと出ふ門氣

色我此女乃見てむりしうらたちかうろをいハを
家りよ事加へ給ひなりおとあの女のをしやう
女の所へ行て業平乃女のしるこるやうにしるり
たむしろに衣りこしきこよひをや
忘しき人りにしてたゞ孫ん
しの云古今第十四に○さむしろに衣りこしを
今夜もやまれ我待らん宇治乃りし姫とあり下句
をうへてかけり心は時なりあよひをやかく毎夜
乃詮見しこうあれかに兵夢なり哥かく男女乃中
おやりしるるすゑえこう
とよ見かりをおとこあれと思ひてそのよを孫に
かわ世中此まいとしておりふをそおりひおもいぬ
おこおもはぬそのをこの人はおりふおもをそぬ
なもをちめこせぬこころなんあわけう
けちめ法同見せぬなり験乃字也業平の性をり
かわ人ハ故悪の別なにそのなるり業平ハけち
め見せぬ人なりと鬼者乃かめくりをうなる下し
源氏物語り源内侍なと乃招なわ世中乃まいん
例なり世乃なしひなわ
むりし男女みをかかりこうふわきもをさわれい
いつ見なりまんあやしさりよめる
ひをうふかこ孫ふわきををはいつ見りあり
とをしこしあやしさふうこをよ見てなりて心を
こんとなり

吹風り我方をなさへ至せられ
ひ海もとめ法らい海色き物を
まゝ方を風りなさるやなわ風ハいほくりも
ひ海ある所をりとめいるものなれもなくねのひ
いふ也風り方我なさへりと見いわて見んこの
おとなわ所ハ此もの字に切なるんなわ
の色し
とりとめぬりをかは有とを毎度をそれ
こゝゆゑ法もの ひ海をとむへ
むまりとめていふ海色きといふをおさへていなり
うをハ多り法らにとらまぬものやとまとめぬ
風なりとをこ海をこれ乃むまり試こなこりゆゑ
してをとめさせんりしうといふなり
むしおほやけおりしてほうし竹ふ女乃いろゆる
されうれあわせりおかゝやまん所とていまほうわ
せりいとこなりなり屋上にさふひきりあわもう
なりをうおとこれまゝいとまうりけうをこの女
あひしりこりなり男女かゝゆゑされこりをまけ女
乃ある所にあそむうひおわなれも女いとかゝも也
方をお法むなんうくなをうやいひなれハ
おほやけおりして清和御門の御寵愛なわて
めし法のなる女なり色ゆゑされそう禁色我ゆふ
さ海こなり禁色乃宣旨といふ事の女をいろゆゑ
されうれハ綾織物をまうれり禁秘抄云聽色大臣

女我は大臣乃孫也おほみ屋に所染殿后なりいはそうわぎくおはしはす也在原なりける男業平也女うこゆるされこうぎく奴色第一の人也と世上にゆれしこれといふ説ありあくはいうなわおんなの侍は臺盤所なり所殿上人まで業平乃女中才へもゆるけれて内かなくめしつかハはくあと心得色き也採政なとを女の侍にて御對面一しを乃貴賤也内々乃とこ後なわい然うこはなり男もかろひぬ色しかくかをそといひ前れはあれハ女の侍まわうくそしまいらせそ男乃ためりあしこまうこうなこを不可然然いけめていへる也愚見にかの為を所輪女乃きにに所なに有

おもふまは思ふりあとそ成ぎくまる

わふにしうへハさもあらハあまき

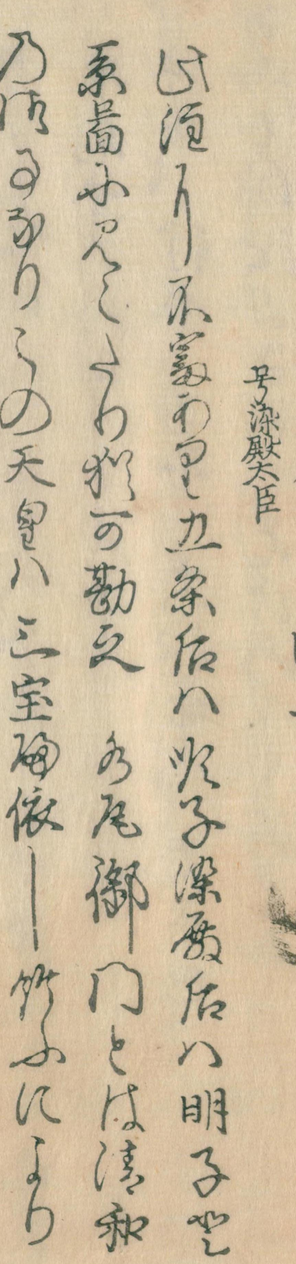
哥の心をか明なりけをあらはあまき任化とうけ里といひてさうしにおほ里たまへまいまいのあのこけうしにはんの見るおもしてのかわぬけまを此女おりひまひてさとへ行されはなまの乃よきおぼる思ひていまうよひぎれを見なん人安てわらひ久わさましり物わ行へまハ臺盤所ハ侍まわとて房へをりたまふ也曹子ハ侍居なりことへを粗人のみなおをはうらてのほりぬ粗なりこの女思ひまひてさとへ行さまへなに乃よなあとこ思ひて女の里へ行ようよきなよと業平乃おもふなり

畫くを定而四位五位あまたるまゐりよりなと殿
上人おかき時ゆはおくへ臺盤を居ちて其をとせ
てしきみ幕あまよりもとられひまいまれなとせう
なりこの時業平殿上あれ狩をして女乃さと面
ひくあまる日とく加へ里て重殿司に見るよく同
をおくるなけ入て夜んこゝりしめこれかなし
ていれ也うやうよみれハ何乃さうにもなれなり
重殿寮といふも清殿をいふさとゝりの也を男嘗
上せよりゆへ此其寮より女嬬也いふ女をそてゝ
清殿ハこの後やくするなり殿上人なと此も清和
それなとしてあはりのなり
後宮職員令云

殿司
尚殿一人掌供奉輿徽之事沐炊油火燭薪炭之事
典殿二人掌同尚殿女嬬六人
掃司
尚掃一人掌供奉席洒拂鋪設之事典掃二人掌
同尚掃女嬬十人
うくうたいふしはくハ業平乃事男もかろひ
ぬなし也いふも后れ清事なりおんやうしうん
女夫陰陽師巫覡うんなれ女見て一段心誠をこし
ていのうなり
こひゃしとみたら志川にせしそうき
神はうけれをなりりをうかな

古今第十一讀人不知愛也ふ逢意に入るゝ下句
かゝんはうけすをなりにけらしを前乃心は明也
神佛ありしほなそいの乃きてとを意しほのいやまさ
きハかゝんもうけにもなりあるる哉世治定してを
ひらおうこなりあられふりし定家心不逢意ふ
行めらりあふををしらぬ見そき河うれしきゝ
はうに海さ里ほく　こひをしとせしみうき
こううををとをあふをもゆりをうものみほうな
世いひてなんいふをり
このみかとをあかりこちよくおはしましてあとけ
乃ほ名誠ほこ落りいれてほこ思ハいとこうとく
てやし所ふを字て女もいこうなきをわうろ思り

ほうまつらてすくをほこなくうなしきあとこの
おとこふかをされてとてなんなれをうゝるあと
にみとくきこしめしつけてこのおとこをはなりしほ
あるしてかれをこの女乃いとこ乃こやをところ女
をハまうてさをてくらにこめくしおりをたまふあれ
もくらふこりてなく
此ほ門世いふよりしめて讀なり頃ふくハるし
定家心勘物ふ清和天皇膺大之遊漁獵之娯未嘗留
意風姿甚端嚴如神性めしかわなとおもしこ海
をて佛法ほ信心誠かけさせ給なり誠能を義廉ほ
ましくて佛神のことくきせくりわこらせ
こまひしなわしよし國史ほのせ給わうろ君ほ



とも見れ有りあるんと 有ふらん我方ハ此世に
あれ何もあらぬ躰なるものおとしいふ心有り
覚おりひおわおとあも女しあまねたくしあ里
きほく人のくにありあわまてかくうたふ
いたつらりゆきてはきぬるものゆへ而
見まくなしほかいさなれほく
ふん時なり此要古今第十三續人しらに覚ひわ
されとも人丸の要なり業平たくいまの心に同記
なとりこゝにくうたひをうまや詠此也
あのをの時時なほ見しおほ こやもをん不もそめとの
乃后なり五条の后とも

閑院左太臣
冬嗣
贈大政太臣 中納言
長良
清和后陽成母二条后
高子
文化母仁明后五条后
順子
忠仁公
良房
号染殿太臣
明子
文化后 清和母 染殿后

此頃より不家あり也五条后ハ此子染殿后ハ明子也
系圖に見えたり猶可勘之 各尾御門とは清和
乃后なりこの天皇ハ三宝海依しゆふにより
て後に山城西水尾といふ所より清隠遁ありて
ましくされとも清廟乃山今に所に在
むりしおとこ清乃くにりしたる覚ありしなり

あまをかくともたちひきねてなゆは乃才に升き
まりを幾に残みれも無ともありをみえく
志る不知り也葉平 財りありまして ひ波もを
まりまや知りあとへ下向して遅敷あり也葉
平兄弟女人あし人なり
仲平 行平 当平 大江当人 葉平也
あふ事をけさあり見法乃うらあと云
あまや この世残う見わたる海船
後撰第七にあわけさしうをかふしうとかけり哥
の心をもてハ肥皇なり下乃こ海はあるに船の海
上にうかひ又流り 何里を奥なりまた世をうこ
わたるあとわさ此家を思ひて 横海なりこれやしけ

よをといへ 此ハ世間のすをおりひあはきそい
へるなりをさハ今約りあらもいあると云也
あまの残あま積りて人をかなりにかり
むし男せうゑうしり おりふ空ちのひつら孫て
いはこ乃國へ きさらきたり里まいにかりうちれ
くにいこ山をこまいくりしも見えらいる雲
やますあしあよりをりてひふれまたり雲いと志
ろう木のすゑりしふりたりそまをみてものゆく人
のなりにたひとりよみをり
前の頃の法なり二月 鎌倉の時かなり友ハ
葉平なり
時ゆふ 雲のたちはひくろふハ

花乃りやしをうしとなりなり
おもしもしとうちを同道してきこれり雲
乃たちまひて山をかくせハ曲をなれるの也かく
ろふいかけろふ乃心能り雪乃いとおもしろき
ハ只今万株乃ひらなて花乃林乃あとしきのふ
ろふ乃雲をこの花乃ちやしを我ひとりこを
志覚おりひこれ懐惜乃心有々体也狂雲妬儘月乃
んなりこゝいまくこのをまく一入面白し不詮
こまれ我おし見つゝんとよめ体なりうしなる
体色しはおしとなり五音ね返也をしとをいふ
色きなり肖字り時もこうあまあれりまま逍遙す
分時分ふかくをもあやあくなるくこのさ体なる
といふんよりねたくおりひてかくにと云んハ出
そうへし是作者乃おもふへまゝ不なり
むりしおとこい川みの國へいなくりすこよしのこ
ほり住吉乃さとも見よしのを体我りにいとおも
しろをまはおり井つゝゆくあり人を見よしれ
を体とうめ覚いふ
こゝを前の時乃はゝきなり見をみよしし乃を体
をりとりりかくは解情あれましき我を見よし
乃那をみよししの里住吉乃を体と面白なり
ろふうみ分春乃うしへ乃名なりをり住吉れさと
すみよししのを体と讀所なりす見よしし乃那今
は両生也上古乃名をかへたるあと多なとふあの

物語乃時分ハ何わそ志ほらん
厚鳴て菊の花さく秋のあまと
喜乃海へ入りしを見よし乃たま
住吉ようわ鳴住吉にさくの花にたくとよむゆは
あらぬ世間乃秋の京氣をいふなり世より厚鳴菊
乃たれ行く秋はあまとも今喜乃うし見面ゆ住吉の
花は其の秋よりも物語さまろ世いふところ也
○白菓のふかゆりあきを忘鼻
生てふき志のたゆれうらうせ
くよめりかれて三家人とよまれなりけり
感慨をおこしてこの家りおよふをあらまし
前れハ鴨答中さんにあらぬとてみな人く哭

をよ國さ家なり
ひしおとこあわけわそれおとこ伊勢の国にうわ
乃清うひりいまゝるり
此頃乃ゆ題号乃時のへ入わ伊勢物語といふ題
号りあハせんこめに此さんをりしにあめ家が
あわ伊もあ所ね也不用説也物の使ゆむりしハ
諸國へ物をいきんためゆ勅使ゆてらゆくゆ
國史りしをわ磨りわ覚見てこわ光孝天皇なと
乃御時りしけくくさまりこなわ業平ハ伊勢
尾張安國の物の勅使にわり也異朝ゆを巡字誤物とて
自分くふくをめくりてうまをうたこ國の治吉
をこんこめなりこれくにも一任三年にて吏務

おもしろき思ひしこんこれりのふみをりこし
むかしり當住乃そのかなりと國を治むかうみ
を見乃うまへなくしたるふかなんとをこせし
めんため也國は當可然やうふあひはかゝる事は延
住させらるゝあとをしらわめ此乃るすこまりあひ
申せとの子細ふくかわのほかひ也しそほかは
さるは事なるは事
かれ伊勢乃秋宮城をかくのおやほれほのひより
はこの人よくいこそれといひやれりかれはおやれ
事なりかれこいと稱んこゝろりいこゝりかり
秋宮は居子内親王なり惟喬親皇也一腹なりを秋
宮乃母やまた名虎が紀朝子なりされとも此親と云
は深藤乃后と見る事し秋宮乃継母なりされとを
如實子ましたまへ里又業平深藤后へ家礼なれを御
詞をくりへ見れこれなるは親乃方より詞をう
事なるふよりて事にして心ぬそへこまたる也
あしこふはかりりいふしたてこゝゆふさり
はかへ里ほゝ世あふこさせ世りかくて稱んこ給ふ
いたほゝかわ二日也いふ夜れとこ里てあそんと
いふ女もそこいとおりしとを母りへらはさまと人
めしけれはえあます清かほのひさほ也ありひと
なれはとぬくもやとほを女乃ねやをちかく有けま
を女ひとを志けめてねひとけるかわり男乃もと
りきこまかわ

あひやしたるすもあるうしつんけるまやる階民
も詠家服とて今は此民はけんけい不叶とする階
擧緒子所尚実者業平乃息なりといふ
おとあいとうなしくて孫は敏母をりけとめくいふ
りしけまとまゝ人我屋家へまゝ小しあらまはいとん
りとなくてまちおまはあけたなまてしたしあるは
女のりとよりしとはこなくて
いふ（詩字）しいこ落りとなれ心所り我人をやる屋き
にしもあらねはけらの里て屋を落ふん所り後物
乃文を詩ゐて我乃時さ後なり
君やこし我や遊ぶ世んともかえは
夢うらはつかねてう覚てう

古今第十二詠家なりしり人のよめ後世あ里ちの
うたはこゝ君やこし我屋ゆき世んといふ二句を
おもかえをといふよりすゑ而そいひのへそう也
荘子の夢り蝶になりたれの志らは又蝶の荘子
になりたれがといふうことし
おとこいといたうなれてよめ後
業平也その折ふし乃さ後おりふへし亡絵としこ
後拾なり
うきくらにんれ屋をり後とひにき
ゆめうつゝといこよひさゝめよ
君やこしまれやゆきあん世いあるうわまも
うけ之後り後ことく後とも折ほえす夢のうけ

かを今夜逢てさらめよとよめり古今ゆはよひと
さらめよとありよ程りさためよ也いふんなり
この物語ゆも此説をつけられとも夜ハな我す
されはなし。○あま程なる心れやこのゆうわとも
見し夜れ夏をそれかさらめん
とよ見て居わそうわりいてぬ聖りありけとん
はうらまそこよひたに人を津めていととくあれん
とおりふりくゆのかゝいけき乃こやのうゑかけ
たるうわ乃ほうひ所わと申そこよひ也よさけ乃みし
けれハ也ちうあひあとも元をそあけハ尾張乃くに
へこちなん也也まハおとおを人志れをちれなこを
をなかせ也元あそれよやうくあ母なんなするか
と母女かこよりいこれ所ふさのさらりうこ我
かれていこしこりてこまきハ
國乃かこゆく伊勢守秋家乃以を無こうこのこき
て我ひとよさけのこ餐遊せうなわをもう事一に
あひならんとするあとも元せまり也尾張の國へ
伊勢乃物はなてこ尾張へ行なり一國乃内の物
乃使の日数も定こう女才まり乃ゆかれたおとこ
を人志ますとあうまて秋家乃心をやまこう血れ
なこたハ無切乃所をいうんとそうくいふなり
果ちんのわされとぬ連ぬえにしあまハ
上句りりを書こうこゝろを淺さ志んといふんた
めなり一我あひ見る事をいふ此ホを連奇乃お

別 9 5 29

しりとすりまや
覺うなてすへいあしそれさかはなの乃はらりつい
まほのすゝしてうこれすへ殘りなはく
つい成けたひまけ也續私の音ね通也私をね續て
とも也雅而云也をとりしさし乃きへ其をみくゝ出
はくなり
又あふはうのをきもこ為なん
新為のからも淺な孫と思ひとも又逢ふ事も有面
き覺云也業平兩京乃道にわふさ可をそへよめり
とて何くれは尾張乃面へこえけり欲ならはあ乃をれ
清時文徳天皇の清女あまたうの乃をこのいもうと
あれはさな乃と後注れやうに申なり

国立国会図書館　タイトル『闕疑抄 5巻』 請求記号 WA7-45　ガラス使用

9
29

国立国会図書館　タイトル『闕疑抄 5巻』 請求記号 WA7-45

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『闕疑抄 5巻』 請求記号 WA7-45

ガラス使用